

闇に紛れて痛みと愛を

東雲咲夜

「僕は父親に犯されたんだ」

歌うように、夜の暗闇の中で、彼はそういった。

馬鹿馬鹿しいよね……でも。

「忘れられないんだ」

そう彼は続けた。

その彼の姿を私は忘れられない。明りをすべて消した暗い部屋。

闇の中で浮かび上がる、白いその裸体も。

愛しいような、痛いような。そんな夢で私は目を覚ました。

彼の夢を見たのは、初めてかもしれない。

こんなにも、鮮明に覚えているというのに。だからこそ、夢に見ただけけれど。

ベッドの中でまどろみながら、私は数年前に付き合っていた彼の事を思い出す。

今は別れてしまったけれど、それでもまだ、想いはどこかにあるだろう。

でも。

今思い返すと、私はどうして彼に惹かれたのだろう。

確か彼と付き合い始めたころ、私は男に振られたばかりで、男性不信におちいていたというのに。

それなのに、まるでナンパのように、街角で自分から声をかけるなんて。

おびえた子供のような……それでいて鋭い蛇のような目をしていた彼。

「物好きだね」それが、彼が私に初めて言った言葉。どう返事をしたかは、不思議と覚えていない。変な女だと思われたのは、確かだろうけど。

その後どういうわけか話が進んで。何度か一緒に出かけたりして。

気がつくとき、体を重ねるまでの関係になっていた――

彼に妙な癖があることに気付いたのは、そのころだろうか。

何故か、いつも微笑んでいるのだ。にっこりとした笑みではなくて、皮肉さを含んでいて、それでいて艶のある微笑。

見る人がみればくらくらときてしまうような。口元が、きゅっとつりあがっていた。

二つ。彼は、暗闇が好きだった。彼の家、私の家、ホテル……食事を終わると、彼は部屋の明りをすべて消してしまう。

その状態でテレビ番組をみることもあった。

もちろん、体を重ねる時も暗闇の中でだった。ベッドサイドの明りすら、灯さない。私の体は闇のなかに埋もれてしまい、輪郭がぼけてよくわからなくなる。

次第に闇に眼が慣れてくると、彼の体がぼんやりと浮かび上がってくる。

色白で、男性なのにしなやかできゃしゃな体つきをしていて。化粧などをすれば、その辺の女

性よりもよく似合っていたらう。

私は、その光景が好きだった。美しいから、それだけの単純な理由。性別に関係なく、綺麗なものは綺麗なのだと思ったのをよく覚えている。

それを彼に伝えたことはない。きっと嫌がるだろうから。

何度めの夜だったか。暗闇の中、彼は私の上で話しはじめた。僕は父親に犯されたんだ——と。ひどい、とも信じられないとか可哀そうだとは思わなかった。

ただ、胸の中に突き刺すような痛みを感じただけで。私は何も答えなかったのだけれど、彼は話を続けた。

中学生くらいのころに、そういう目にあっただのと。事が終わってから、彼は自分の父親に聞いたそうだ。

どうしてこんな事をするのかと。すると、父親はいったそうだ。

『お前は綺麗だから、すぐに結婚してしまうだろう。だから、忘れてしまわないように』

もともと血のつながりがあるのに。それだけでは彼の父親は満足できなかったのだ。食欲にも、体の繋がりまでをも求めた。

結婚がどうのなど、なんの関係もないだろうに。絶てぬ繋がりがある以上、忘れられなどしないというのに。愚かな男だったのだろう。

「意味がわからない。恋人じゃないんだよ？ ふざけてる」

そう彼はいった。口の端をくいと綺麗に吊りあげながら。でも、と彼は続けた。

「皮肉だね。アイツはもういないのに、体が覚えてるんだ」

忘れられないんだ。

「ああ、気持ち悪い」

ね、そう思うでしょう？ と彼は私に同意を求めた。私は——

「わからない。でも痛いとは思わ」

そんな風に返事をしたんだと思う。あまりはっきりとは覚えてないけれど。痛い、いたい。

体がなのか心がなのかはわからないけど。ただひたすらに痛いだろうな、と思っていたのは確か。さっきよりも強く口元を歪めて、彼は私から離れた。

何度か、行為を途中でやめてしまうことがあった。別に気にしてもいないし、もどかしくもなかった。体に溜まった熱だけは、もてあましていたけれど。

彼はいつも体温が低めだったから、わからない。私の熱が伝わっていたのかどうか。体は繋がっていても、肝心なものは繋がっていなかったのだろう。いつもそうだった。

奥底では、人を……他人を拒絶しているのだろうに。それなのに、彼は何度も言うのだ。暗闇の中で。

「この闇の中で、僕を愛して？」

吐き気を催しそうなほど、甘い声で。白い腕を絡めてくる様は、まるで生まれながらの娼婦。そうして、彼はまた別の話をする

。父親のよく飲む酒に、睡眠薬を混ぜて殺したらしい。真実かどうか、そんなのわからない。ただ、彼がそういっただけで。

今はもう母親もなくなっているとのこと。だから知っているのは私と彼の、二人だけなのだと。

「二人だけの、秘密」

悪戯っぽく口元に指を当てて。

艶然と笑う彼。

私はそんな彼の頬へと手を伸ばす——

生ぬるい温度になったベッドの中で考える。彼は今どうしているのだろう。

私は、自分から手を差し伸べて、愛してあげたのに……想いか、秘密かはわからないけど。重さに耐えかねて逃げ出してしまった。

あの秘密は、今もしっかりと胸の中深くに沈んでいる。

幾度となく、他の男と付き合った。私は、彼から逃げたのに。

他人と関係を結べば結ぶほどに、彼の影は強く濃く、いっそう鮮やかになっていくだけで。そうしている内に、気付くと私のほうが娼婦のようになっていた。

相手の日に焼けた小麦色の肌に、灰白い色を幻視する。身体だけじゃない。耳で、目で、頭で……心で。

私は彼の感触を覚えていて、忘れられない。自分で進んでした行為で、こんなにも。無理やりならば、どれほど強く深く刻みこまれるのだろう。

生々しすぎる夢をみたせいだろうか。無性に彼に会いたくなかった。彼のアパートの場所なら覚えている。

私は越してから、彼に教えてはいないけれど。本当に逃げるようにして別れたのだ。

会いに行きたい。また、繋がりたい。

繋がるものなどないというのに、愚かな私はそう思った。

自分で誘って、捨てたくせに———気まぐれにこの手で拾い上げるの？

それでも、体は衝動に素直に動いて。気付くと身支度をして、家の外へと出ていた。駅から電車に乗って、今も彼がいるだろう場所へ。

車内で揺られながら思ったのは……私は、彼の闇に魅かれたのかもしれない、ということ。

いつか、彼がいていた。父親に凌辱されてから、自分の中には闇があるのだと。それはとぐろを巻いていて、巻きついて離れないと。

私の中には、白い闇が絡みついて離れない。

色あせることのない記憶をたどって、駅から歩く。彼が住んでいる所の売りは、駅から近い事だったような気がする。

アパートの階段を上り、部屋の前へ。部屋番号は、四一八三。そんなに部屋の数はないのに、やたらと桁が大きい。変わっていると思う。

ドアの横にあるインターホンを鳴らすが、反応はない。未練がましく持っていた合い鍵で、鍵をあける。きしんだ金属音が小さく響いた。

中に入ると、暗い。真昼だというのに明りがまったくついていない。半開きのドアから差し込む光で、微かに見える程度だった。

昔と、物の配置がほとんど変わっていない。ドアを閉めると、真っ暗になった。窓やカーテンには暗幕でも貼ってあるのか。光がない。

そんな中を、記憶を、手探りを頼りにして歩く。途中トイレか何かのドアに、何度かぶつかってしまった。それでもゆっくりと探っていると、リビングとおぼしき場所についた。

指の先に明かりだろうスイッチの感触がしたけれど、そのままにしておいた。ぐるりと見渡しても、誰かいるような様子はなく。

気配なんてものわかるわけじゃないけれど。でも、どこかには居るような気がしていた。

声を出して、名前を呼んでみようとしたときだった——首に、ひんやりとした腕が絡みついて。

「また、僕を愛して？」

闇の中で……と響いたのは、私の声か、彼の声なのか。声にだしたのか、頭の中でなのか。

私ははっきりと声に出して、彼への答えを告げた。白く浮かびあがるその腕に、指を絡みつかせて。

『アイシテ アゲル』

この暗闇と痛みの中で、愛してあげる——